

[書評]

伊藤貴雄著  
『ショーペンハウアー兵役拒否の哲学』

村 井 洋

1.

アルトゥール・ショーペンハウアー Arthur Schopenhauer (1788~1860)<sup>1)</sup> は白髪で厳しい表情の肖像と「厭世哲学者」というラベルが貼られた孤高の思想家というイメージが強い。本書はこの哲学者の思想が現代日本の状況と強い関係を結びうることを証明した書である。結び糸とは「兵役拒否」である。徴兵制度は日本人の個人的・集合的記憶から急速に遠のいてしまった社会制度であるが、近年の憲法議論を見ればショーペンハウアーが哲学的信念に基づいて論じた徴兵拒否論が今後の我が国の議論に大きな寄与をなしてくれる可能性が高いと思われる<sup>2)</sup>。

本書はすでに複数の書評をしかも高い評価を得ている<sup>3)</sup>。にもかかわらず、出版後4年を経てここにさらなる書評を行うのは、本書がいまだに思想史研究に貢献したインパクトを失わないのとともにより上の時局的な理由による<sup>4)</sup>。

本書は著者の学位論文をベースにして折に触れて書かれた論文を集成したものである。しかし、その叙述において見事な一貫性をもって再構成されている。従って本来なら章を追って順に内容を紹介する方が適切であろうが以下では叙述を簡略にすることを目的として、結論本意に本書の大意を追ってみることにする。

2.

著者の主張の中心はショーペンハウアーには徴兵拒否の思想があり、それは検討に足る思想的根拠を持っていることである。実はショーペンハウアー自身、兵役を拒否した経験があり、この経験が彼を兵役拒否論に導いていったと推測される。その歴史的背景には1813年プロイセンが敷いた一般兵役義務制がある。このときすでに金納による兵役代行制度が廃止されており、ベルリン大学では J. G. フィヒテが「個人を国家に捧げる」演説で学生に戦争参加を呼びかけた。ショーペンハウアーはこれを拒絶しベルリンを去り隣国ザクセンに逃れる道をとったのである<sup>5)</sup>。

その思想とは、徴兵を行う国家の本質への洞察と批判、ならびに個々人がエゴイズムを克服して属する《共同体》を超えた《共同性》への道を開き歩む道を示したことである。すなわち懲役を拒否したからと言ってひたすら我が身可愛さに生きるのではなく、国家が持つことができない「真の共同性」を志向するのである。おおむね以上が理論の筋道であるが、著者の説明に従ってやや詳しく見ていくと以下のようなようになる。

なぜ、ショーペンハウアーは国家を批判するのか。

著者はそれを青年期にフィヒテの講筵に列して書き留めたノートと『意志と表象として

の世界』などショーペンハウアーの根本思想に遡って説明している<sup>6)</sup>。これらを要約すると、人間の存在は「表象」と「意志」の二重の層を持つものである。このうち「表象」とは認識の対象になり得るものであり、カントの概念を引き継いでいる。一方「意志」とは人間達をして生かしている「衝動」のようなものであり、これは認識の対象になることなく存在している。これにはカントの「物自体」が対応していると言えよう。この二重性を持つがために人間は「自己」という在り方をとることができ、ここでは「意志」の特徴を帯びて高いボルテージを得ることになる。「エゴイズム」というのがそれで、これによって一方で人間の自己存在は自己中心的にならざるを得ず、他方で他者を単なる現象と見下すほどに落差をつけて他者を扱う。なぜならば、他者は表象という一重しか身にまともない存在であるからである。しかしこの状態はエゴイズム同士の闘争状態「万人の万人に対する闘争」にならざるを得ない。そこでこの闘争状態を収束させるために、相互の契約によって闘争の終止符を打つことになる。ショーペンハウアーは、国家はこうしたエゴイズム同士が相互の契約によって生ぜしめたものであると考えた。従って国家はエゴイズムによって作られたという事情によってそれ自体がエゴイズムの「結晶体」である性質を帯びてしまう（220頁）<sup>7)</sup>。

このような性質をもつ国家が行いうることは、成員に対して消極的な効果を持つものでしかありえない、とショーペンハウアーは考える。成員に対して強制できるのは不正をして他者を苦痛に導くことの禁止という性質のものであって慈善を行うように強いることはできない。エゴイズムから出発して作り上げられた国家は成員に対して「国家のために死ぬ義務」を課すことはできない、というのである<sup>8)</sup>。すなわち、ショーペンハウアーにとってはフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』の説得はいかに美辞を纏おうとも「エゴイズム国家」の自己主張にしか受け取れないのである。

しかし、ショーペンハウアーは国家に「共同性なき共同体」という「汚名」を着せそれに対する命の奉仕を嫌っただけなのではない。むしろ積極的に国家を超えた共同性を望見していたというのが著者の主張である。それは、「共苦」「禁欲」というキー概念を軸として進められる議論である。このうち「共苦」に限ってフォローしてみよう。ショーペンハウアーの思想の底には「生は苦しみに満ちている」という思想がある<sup>9)</sup>。これは他者の苦しみを見てそこに己の苦しみを重ねて認識することができる、という思想へとショーペンハウアーを導くのである。かくて、著者は、エゴイズムから出発した思想家の行程にエゴイズムを超えて共同性を実現する道を発見することになるのである。

### 3.

本書の特長は少なくとも二点挙げられよう。第一には哲学者、思想家ショーペンハウアーにこれまで気づかれていないライトを当てたことである。カントーフィヒテーシェリングーヘーゲルーディルタイー哲学的解釈学ーハイデッガーーガダマーというドイツ観念論から流れ出る思潮から見るとショーペンハウアーはいかにも傍流という評価しか与えられていなかった（ニーチェを介してあるいは独自に、実存思想に与えたと思える影響は考えられるにせよ）。著者はこれをヘーゲル史観と名付け、これを乗り越えようとする。これが実現したか否かこの点についてショーペンハウアー専門家の評価を仰ぐしかない。むしろ評者は第二に、平和・軍事思想史、より正確には「徴兵思想史」の可能性について著者

が与えた影響を評価したい。本書にはマキアヴェッリ、ホッブズ、ルソー、カント、フィヒテなどの徴兵思想が記述されており、日本に関しても朝永三十郎のカント解釈をはじめ若干の記述がある<sup>10)</sup>。日本においてはすでに徴兵制度史研究についてはかなり厚い蓄積がある<sup>11)</sup>。また制度が日本社会に与えた影響についても精緻な研究業績がある。しかし日本思想史の中で「徴兵」がどう扱われたかはまだこれからの研究課題である。著者の業績は説得力ある知見を多く含んでおり、これからの発展が期待される所以である。

## 注

- 1) ショーペンハウアーの伝記的事実として以下の事項を挙げておく。ドイツバルト海沿岸のダンチヒ（当時はプロイセン領、現代ではポーランド領）に豪商の子として生まれ、幼少年期をハンブルク、フランス、イギリスに居住した。その後、ベルリン大学でフィヒテの授業を聞くなどした。学位論文に「根拠律の四つの根について」（1813）、主著は『意志と表象としての世界』（1819）（『哲学思想事典』岩波書店（1998））。
- 2) 近年あらわれた議論のうち興味深い一例として以下のような叙述を挙げておく。「軍がシビリアンの道具であるという認識を修正し、かつ多元的で自由主義的な社会に近づけなくてはならない。」「・・・ただし現状は、国防の任務の軽視と無関心が大勢を占める一方、他方では国民全体に自らのコスト意識なしに専門的な軍を用いて戦争をやらせようという発想がある。この発想がなくなる限り、攻撃的な戦争はなくなる。共和国像に近付けるためには、・・・」三浦瑠麗『シビリアンの戦争 デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、229頁。憲法改訂が政治日程に載る今日、徴兵制の合憲性、妥当性が議論の俎上に上る可能性も小さくなくなっている。
- 3) 齋藤 智志、「伊藤貴雄著『ショーペンハウアー 兵役拒否の哲学 戦争・法・国家』」、『実存思想論集』31号、2016年。ほか。
- 4) 政権指導者は日本国憲法条に照らして「苦役」に該当するゆえに徴兵制は念頭にない、と語っているが、かかる答弁が覆ることは安保法制が違憲性から合憲性へと覆った記憶をもつ我々には樂觀視できない。
- 5) 「私はいかなる仕方であれ腕力によってではなく、知力によって人類に奉仕するように生まれついていること、そして私の祖国はドイツよりももっと大きいこと、これを深く確信していた」（1813年イエナ大学哲学部長への手紙）本書116頁。
- 6) 著者が述べるところでは、ショーペンハウアーのフィヒテ理解には誤解が混じっていることがあり、場合によってはフィヒテ思想の実像がショーペンハウアー自身の思想であるほどのこともある。しかし、ここで確認すべきは、ショーペンハウアーがフィヒテとの対決を通して自己の思想を形成してきたという事実である。
- 7) ショーペンハウアーはそれゆえに国家が道徳性をたかめるための機関であるというカントの説を斥ける。
- 8) ショーペンハウアーは『余禄と補遺』のなかで「大学生は山ほど勉強しなければならぬのだから」という理由で兵役に反対している（本書239頁）。
- 9) これは仏教思想（一切皆苦）とも通じているであろうし、カントに関連しても快樂と苦痛とで比較すれば人生は苦が勝るといふかれの幸福論も想起させる。
- 10) 一方、本書の問題点を指摘するだけの力量に欠けることを評者は自覚している。小さい点であるが、マキアヴェッリの軍隊思想を常備軍か民兵組織かに分類している箇所はマキアヴェッリのもとも

との分類が自国軍、傭兵、他国からの援軍という三分法であり、動機が自国軍を創設することであったことを想起すれば「常備軍」か「民兵制」かという基準にあてはめるにはやや無理があるとの感が否めない。しかしこの点はすでに他の書評が指摘している点であるし、本書の美点に比すればわずかなものに過ぎない。

- 11) 明治初期の代表的徴兵思想というべき西周『兵賦論』は、前半で日本を取り巻く世界情勢をとりあげ、特にイギリスとロシアの対抗戦争の戦場がトルコ、アフガニスタンと西から東へと移行してくる状況から100年のうちに大きな戦争が日本を巻き込んで生じる予言を為し、後半は常備軍を整えるために全ての成人男子を短期間訓練し速やかに予備役に編入しておけば比較的短時間かつ低廉なコストで軍制を整備できる構想を述べている。

キーワード：ショーペンハウアー、徴兵、平和

(MURAI Hiroshi)